



Title	古墳時代の馬具生産
Author(s)	田中, 由理
Citation	大阪大学, 2009, 博士論文
Version Type	
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/57880">https://hdl.handle.net/11094/57880</a>
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 <a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">＜a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"&gt;https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed</a> >大阪大学の博士論文について</a>をご参照ください。

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

【1】

氏 名	たなか ゆり
博士の専攻分野の名称	博 士 (文 学)
学 位 記 番 号	第 2 3 3 1 4 号
学 位 授 与 年 月 日	平成 21 年 9 月 25 日
学 位 授 与 の 要 件	学位規則第 4 条第 1 項該当 文学研究科文化形態論専攻
学 位 論 文 名	古墳時代の馬具生産
論 文 審 査 委 員	(主査) 准教授 高橋 照彦 (副査) 教 授 福永 伸哉 教 授 荒川 正晴

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、日本の古墳時代中・後期（5・6 世紀）における代表的な考古資料の一つである、馬具、すなわち馬に取り付けられた道具や装飾品の類を検討の主対象に取り上げたものである。そこでは、馬具の生産の変遷と馬匹利用の実態を具体的に解明するとともに、馬具の生産組織ならびに関連する政治体制の動向、国を越えた交流関係などを探り出し、さらに社会の成熟度の側面から歴史的意義の考察を試みている。

本論文は A 4 判 200 頁（本文 400 字詰原稿用紙約 570 枚、図 58 点、表 8 点）からなっている。論文構成としては、第 1 章において論文の目的と課題を掲げた後に、第 2 章から第 4 章の 3 つの章において多面的に馬具の具体的検討を重ね、第 5 章をまとめとしている。

まず、第 2 章では、日本列島で出土した古墳時代の馬具について網羅的に検討を行っている。とりわけ法量と形態の側面から馬具の比較を行うために、馬具の外形を図面上で重ね合わせる手法を多用することによって、規格性の達成度を検証し、それをふまえて馬具の変遷観も再構築した。そして、6 世紀前半に国内生産された馬具が中央から地方に配布される威信財としての政治的意義を有しており、各地の首長層の階層秩序をより明確するための規格性（秩序形成型規格性）が厳格に設定されていたのに対して、6 世紀後葉から 7 世紀前葉には効率よく同品質のものを大量に作る上での規格性（工程管理型規格性）が目立つようになる点を明らかにした。

第 3 章では、朝鮮半島の事例を検討対象に加え、日本列島の事例との比較検討を進めている。その中で、馬具の種類や法量によって生産された地域の差が抽出できることを指摘し、剣菱形杏葉など新たな馬具の形態の創出過程についても解明を試みている。また、6 世紀前半に倭で作られた剣菱形杏葉が朝鮮半島南部の阿羅加耶にもたらされたことなど、倭と加耶の交渉史における興味深い諸事実も確認している。さらには「秩序形成型規格性」が新羅でも採用されていること

などをみだし、馬具の威信財システムを日本列島と朝鮮半島を含めて検討している。

第 4 章では、古墳時代の馬匹生産地とみられる北部九州や河内・伊那・上野を比較検討して、馬具と馬匹生産における各地の役割や時期的な変化を追うとともに、文献史学から明らかにされる古代以降の様相と比較して、継承される側面と断絶する側面など、その特質を導き出している。

最後の第 5 章では、それまでの検討結果を再整理するとともに、6 世紀末から 7 世紀初めに威信財としての飾り馬の役割が失われ、実用的な大量生産に向けた規格性のみが維持されていくことから、威信財に頼らない社会統治機構の整備など、国家形成過程においてより成熟する段階への移行がみだされることを指摘した。

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

本論文では、外形線の重ね合わせという手法や馬具の部品ごとの計測など、これまで十分に試みられていなかった方法を駆使して、馬具の形態と法量の比較検討を重点的にを行い、新たな考古学的な事実を指摘している点は、まず評価される点である。また、個別細分化した馬具研究の現状に鑑みて、上記の方法を主軸とすることにより、5 世紀から 7 世紀前半までの資料をかなり網羅的に扱うことに成功した点でも意義深い内容である。

古墳時代の馬具を歴史的に位置付けるためには、朝鮮半島における馬具の実態を解明することも必須の課題になるが、従来の日本の研究で上げられた朝鮮半島の馬具は部分的であって、古墳時代馬具の系譜問題にのみ議論が集中しがちであったのに対して、本論文では同時代の百済・新羅・加耶諸国などを網羅的に検討して、綿密に日本との比較を行った点でも、研究を格段に進展させたものと言える。この他にも、文献史学の研究成果などもふまえて、長い時間幅を見通して位置付けを示す点でも意欲的な内容になっている。

また、6 世紀前半代の f 字形鏡板付轡や剣菱形杏葉などについて「秩序形成型規格性」による威信財配布と結論付け、伝統的な手法を継承しつつ政権安定化に向けて取り組んだ継体朝における政治施策の一環とみる点など、当該期の歴史像を豊かにする指摘である。さらに 6 世紀後半から末頃には、秩序形成には直接結び付かない形での規格性が目立ってくる点を明らかにし、これまで「規格性」と一括りしていた内容を再整理することで、政治統治システムや生産組織のあり方の変動との連関を指摘した点も、今後の考古学研究に波及する興味深い論点であろう。

ただし、いくつかの問題点も残されている。方法論にかかわる点として、外形重ね合わせから形態の類似度を判断する際に客観的基準を明示していない点が問題であり、法量計測比較における微差を地域性に還元できるかなども、資料の基礎的評価においてはより慎重な判断が求められる。また、馬具そのものの検討に比べて出土古墳などの検討が十分とは言えず、馬具の様相の歴史的評価への踏み込みにおいても、馬具のみからの判断に終始しており、既往の考古学や歴史学諸分野の成果を十分に組み込んだ上で、説得力のある結論付けをするまでに至っていない点も今後に残された大きな課題である。さらに、朝鮮半島と日本列島の両者を取り扱うものの、中国の南朝や北朝の動向などに触れていないことから、より広いアジア的視野から歴史背景を論じる

ことも立論の上では望まれるものと言える。

とはいえ、日本列島や朝鮮半島から出土する多量の資料を丹念に集成するとともに、馬具そのものについての綿密な比較検討を行っており、新事実の解明など着実な基礎研究として高く評価できる。よって、本論文が博士（文学）の学位を授与されるにふさわしいものと認定する。